

神宮内苑の工事に現はれた 國民的奉仕の象徴

東京帝國大學教授 工學博士 佐野利器

古今東西の工事を通じて幾多の感心した事蹟はかなりあるが、最近に於て最も個人的に感心したのは、彼の明治神宮造營工事に就てである。

あの工事に従事した上下の工人達は少からず緊張してゐた、のみならず當時新聞等に種々報導せられてゐた如く、青年團の奉仕的努力は、實に國民的奉仕として殊に感銘が深かつた。青年團ばかりでなくあの工事に従事した職業的工人も、それに劣らぬ心からの努力を決して吝しまなかつたのである。

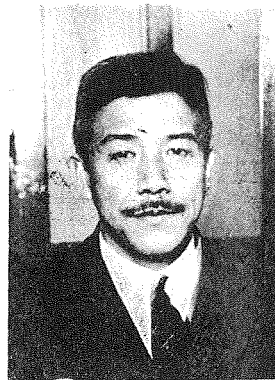
そのうちでも神宮内苑（伊東忠太氏設計）の基礎工事は地下を掘り下けて煉瓦だの砂利だのを埋設する工事であつたが、この工事が凡べての工事の冒頭であつた、それだけこの工事に従事した土工石工達は、より一層の緊張振りを示してゐたのであつた『この工事に少しでも加はることが出来れば運が開ける』といふやうな信念を持つてゐたさうであるその信念は或は迷信的信仰であつたかも知れない、然しながら彼等が『神への奉仕』的觀念によつて、緊張してゐたことは認めてやらねばなるまい、尊崇な神宮の工事に加つたといふ彼等の自尊心は、自分の功德心を喚び起して、これほきの功德をした者には當然その報酬が来るものだといふ概念が、『運が開ける。』もの結びつけたのであらう。だがそれ以外に信仰的法悦を感じてゐたことも事實であつたらう。平常は氣の荒いそして粗暴なといふ定評のある彼等石工

や土工が、喧嘩一つせず、口論さへもしなかつたといふことは、彼等の心中、没我的な神への信仰といふ尊い心情であつたのであらうあの工事を擔當してゐた『組』へ、よその『組』から、たごへ半日でもいいからその仕事をやらせてくれ、これも孫子の末までもいい土産になるから、ご云つて加入を申込んで来た者さへあつた位である。そのために工事の能率は驚くばかり迅速に行はれた、数字的説明は少し困難だがごもかく、非常な能率を擧げたのであつた。

かうしたことは全體ではなかつたが、何分にも基礎工事は明治神宮造營の冒頭であつたから、それだけ刺戟も深かつたからでもあつたべらう。心から全體としてはかうした例に洩れるところもあつたべらうし、工事の末になれば幾分緊張味を缺かないでもなかつたさうである。

青年團の奉仕は大抵十日位宛、交替に行はれた、これは技術的な仕事は出来なかつた農村青年は土工にも使へたが

それごも専門でないから、多く土車なごの運搬に當つた、その中病人等も出来た、が彼等は選ばれて来た以上、病氣で何も出来なかつたごあつては郷黨の人達に顔向けが出来ないといふので、強いて仕事をしたために現場から病院に運んだといふ例もあつた、がごもかく日本國民性が外國人をして奇蹟的な思ひを抱かせたほきの感銘すべきごがらであつた。



Dr. R. Sano.
Professor of the Tokyo Imperial University.

東京帝國大學教授
工學博士 佐野利器氏